

現代日本語「Nのコト」を選択する述語の種類： コーパスに基づく分析

笹栗 淳子(九州大学)

金城 由美子(ATR 音声翻訳通信研究所)

1 はじめに

現代日本語において、形式名詞こと(以下、コト)が「名詞+連体助詞の+コト(以下、Nのコト)」という環境に現れる場合、述語から意味的に必須要素として選択される場合と、そうでない場合がある。必須要素でない場合は「愛している」「好きだ」などのある種の心理述語と共起する。この場合、「Nのコト」は目的語位置以外に生起できないという、強い統語的制約を受ける(笹栗(1996))。

本発表では「コト」が何によって選択されるのかを調べるために、この「Nのコト」の実際の使用について日本語のテキストコーパスの調査をもとに分析する。まず2節で「Nのコト」の分布に関わる問題点を示す。次に3節では「Nのコト」が現れる環境を調べ、その特徴を述べる。最後に4節で「Nのコト」を選択する述語の分類を行なう。そして、「Nのコト」が示す統語分布の制限には、ある特定の個体に対する話し手の感情やその存在を探すとといった話し手の心的態度に関わることを示す。

2 問題の所在

まず、次の文を見ていただきたい。

(1) a.*太郎は花子と話している

b. 太郎は花子のコトを話している

(1)の「話している」という動詞はその補部に「に関する」という意味を要求する¹。この動詞の意味選択を満たすために(1b)では「のコト」が選択され、解釈可能な文になっている。この場合「のコト」は「について」で置き換えることが可能である。これは「のコト」の基本的な機能とも言える。

一方、(1b)の「のコト」が「話す」のような動詞に意味的に選択されるのに対し、次の例は「のコト」が随意的であることを示している。

(2) a. 太郎は花子を愛している

b. 太郎は花子のコトを愛している

「愛している」という述語は補部に「に関する」という意味を要求するものではない。従って個体を表す「花

子」という名詞が補部にある(2a)は文法的な文である。しかし、(2b)のように「のコト」があっても文法的な文として解釈できる。随意的に「のコト」を選ぶのは、「好悪」を表す状態述語「愛している」「好き」「嫌い」などである。この場合の「のコト」の意味的性質は明らかではなく、(1b)の「Nのコト」とは統語的にも異なる分布を示す。(1b)の「のコト」は動詞によって意味的に選択されるため、他動詞の内項と同じ様に統語的分布には制限がない。すなわち、(3)のように受動化できるし、名詞句内でも認可される。

(3) a. 花子のコトが太郎によって話されている

b. 太郎の花子のコトの話し方

しかし(2b)の「Nのコト」は、(1b)とは異なり、動詞に意味的に選択されるものではなく、次の例が示すとおり統語的に強い制限を受ける。

(4) a.*花子のコトが太郎に愛されている

b.*太郎の花子のコトの愛し方²

c.*太郎が花子のコトに憧れている

「Nについて」で置き換えられない(2b)の「Nのコト」は、(4a)が示すとおり受動化もされない。また(4b)が示すように名詞句内でも認可されないし、(4c)のように「に格」をとることもできない。つまり、この「Nのコト」は述語の「を格」(「好き・嫌い」の場合は「が格」)目的語の位置にしか現れない。

また「好悪」を表す述語以外にも次のような場合に「のコト」が現れる。

(5) a.*花子のコトを殴った

b. 花子のコトを殴ってやりたい

b'. 花子を殴ってやりたい

「てやりたい」はある種のモダリティ要素で、他動詞「殴る」に話し手の心的態度をつけるもので、「好悪」を表す述語と同様「のコト」を選ぶ。随意的に現れる「Nのコト」に、上記のような強い統語的制限があり、その分布が(1b)の義務的な「Nのコト」と異なる理由について、次のような仮説をたてる。

¹ 寺村(1968)は名詞を下位分類し、「花子」のような名詞は「コト性」をもたないため(1a)のような文は非文になる、という分析をしている。名詞そのものに「コト性」があれば「のコト」は現れない。
i) 太郎は民話を話している

² 和田学氏(山口大学)、個人談話による

(6) 仮説:

「を格」(状態述語の場合は「が格」)にしか現れない「Nのコト」は動詞ではなく、話し手の心的態度を表すある種のモダリティ要素と呼応する。

以下では、この仮説を立証するために実際のデータに基づき「Nのコト」が現れる環境を調べる。その上で、受動化・名詞句化できるかどうかをテストとしてコトを選択する述語の分類をし、述語のどのような意味的要素がコトと呼応するのかを分析する。

3 「Nのコト」が現れる環境

3.1 データ収集の方法

朝日新聞記事の全文テキストデータ(1987年度7,8月分)を利用し、データの収集を行った。まず文書IDなどの情報を取り除き、句点をデリミタとして1行、1文(1データ)の形式に書き換えたものを本文データ(109,955文)とし、コトを含む例を取り出した。そこから「Nのコト」を含む例を収集し、「Nのコト」を含む例について、後続する要素によって分類を行った。

コトを含む文は13,618文(本文データの12.4%)あり、そのうち「Nのコト」という形式をとるものは、667文(本文データの0.6%、コトの4.9%)存在した。「Nのコト」を含む文を、後続する要素によって分類した結果は下記の通り。

が ³	33	など	7
を	145	しか	3
に	13	。	55
で	9	」	9
と	18)	3
の	5	、	28
にまで	2	判定詞 ³	242
について	6	か	4
は	39	らしい	5
から	4	ながら	10
ばかり	5	その他	18
も	15	計 ⁴	678

図1: 「Nのコト」に後続する要素

3.2 特徴

「Nのコト」が共起する格助詞は、「を格」が最も多い。「が格」と比べてその出現頻度は約4.4倍である。「を格」は他の格助詞と比べて出現頻度が高い格助詞であるが、通常「が格」の1.5倍程度の出現頻度である(国立国語研究所1962)。

また、「だ・です」などの判定詞を後続要素とする「Nのコト」の出現頻度も高く、678例中242例ある。しか

³だ・です、及びその活用形を含む

⁴合計が「Nのコト」文667を越えるのは、一文中に重複して「Nのコト」が現れるものがあるため

し、判定詞を伴うコトはモダリティ要素として働くものも多く、名詞・述語間の意味的・統語的關係だけでは扱えないので、考察の対象とはしない。

4 「Nのコト」と共起する述語

1節で述べた通り、述語「話す」に意味的に選択されたコトは「について」で置き換えることができる。この場合のコトは必須要素でその統語的分布に制限はない。4.1節ではこれと同じ類の述語をリストし、その分布を示す。一方「愛している」のような述語はコトを必須要素として選択するものではない。4.2節ではコトを必須要素としない述語を挙げる。そして、述語のどの要素がコトと呼応しているのかについて分析する。また、1節ではあげなかったが、コトが必須ともそうでないともとれる中間的な述語もある。4.3節では、そのような述語をリストしその分布を示す。

4.1 コトを必須要素としてとる述語

「話す」と同じ類の述語には次のようなものがある。

(7) 書く、述べる、話す、知らせる、尋ねる、語る、聞く、告げる、話し合う、教える、口にする、ほのめかす、話題に出す、ばらす、説明する、説き明かす、披露する、悪く言う、だまる、内密にする、密告する、考える、企む、考慮に入れる

(8) 田中のコトを聞いた。

(8)にある「田中のコト」の意味について、例えば「田中が会社をやめたコト」のように文で述べるができる。この場合、「Nのコト」は「Nが参加者であるイベント」や「Nの属性」を意味する。このように、その対象に文で述べられるような内容を要する述語がコトを必須要素として意味的に選択するため、3節でみたように、「を格」の分布が高くなっていると言える。

但し、次のように「が格」「に格」をとる場合も「Nのコト」の意味は同様に文で述べるができる。

「が格」をとる場合

(9) a. 「あなたの先祖のことがわかる偉い先生がいる」(朝日)

b. その中で自分たちのことがいきなり書かれていた。(朝日)

「に格」をとる場合

(10) 話がすべてお金のことになる(朝日)

「が格」「に格」の「Nのコト」をとる述語には次のようなものがある。

(11) わかる、明らかになる、熱心、とらわれる、使う、ゆるがない、時間を割く

この類の述語から意味的に要請される「Nのコト」には、統語的分布に制限はない。また、この述語と共起する場合Nに関する制限もない。

4.2 コトを必須要素としない述語

2 節で見たように、「N のコト」を心理述語が選択する場合、受動化も名詞句化もされず、目的語の位置にしか現れることができないという、統語的に強い制限を受ける。以下では、この統語制限をテストとし、必須要素ではない「N のコト」を選択する述語を分類し、コトが何に選択されるのかを調べる。

朝日新聞のデータでは「N のコトを」が 145 例ある中、受動化のテストによりコトが必須ではないと思われる例は、3 例のみである。(12) はその内の一例である。

- (12) しかし、大統領はレバノンの米人人質問題の打開に強い関心を寄せ、「人質解放を果たせなければ、米国民は私のことを許してはくれまい」とまで言ったので、結局、大統領を説得することはできなかった。(朝日)

(12) で「N のコト」を選択している述語は動詞「許す」と「くれる」というモダリティ要素からなる。他の 2 例も同様に「くれる」を伴う述語が「N のコト」を選択している。但し、この 3 例とも、投書欄・会話部分からのもので、新聞の地の文には見られなかった。これは、新聞記事の地の文には心的態度が強く現れるような性質がないせいだと言える。このことは、2 節であげた仮説の内、「N のコト」は心的態度と呼応する、という部分を裏付けるものである。

また、小説のデータにおいてもこの種の述語が選択する「N のコト」の出現頻度は高いとは言えない。しかし、現れる環境はやはり会話文か、地の文の場合も話し手が心情を述べている場合である。実際、小説に現れる必須でないコトは、あるデータでは「N のコトを」120 例中、12 例(村上)、また別のデータでは 34 例中、4 例(赤川) 存在するが、すべて会話文である。

以下、必須要素ではないコトを選択する述語をその特徴ごとに示す。

4.2.1 モダリティ要素を含む述語

話し手の感情や視点が関わるモダリティ要素が「N のコト」を選択することが次の例を見るとわかる。

- (13) 「～てくれる」
- a. どうしてみんな私のことをそっとしておいてくれないのだ?(村上)
- b. 「しかしあなたははくにととても親切にしてくれるじゃありませんか? 僕のことを気づかってくれるし、眠らずに看病もしてくれる」(村上)
- c. この一件で僕のことは見直してくれるかもしれないぞ、と山本は思い付いた。(赤川)
- (14) 「～てやる」
- つい、TV でお前を見てうかれちまって。一お前のことを自慢してやりたい一心でな、わっと押しかけたんだ。(赤川)

- (15) 「～ていく」
- どうしてみんな僕のことを玄関マットみたいに踏みつけて行くんだらうってさ(村上)
- (16) 「～(よ)う」
- 「あるとき、谷口さん、私たちのことを撃とうと思えば撃てたのに……」(赤川)

4.2.2 モダリティ要素を含まない述語

次のように述語自体に感情要素が含まれる場合、前節であげたようなモダリティは現れない。

感情要素を含むタイプ

- (17) 君は彼女のことを好むだろうし、彼女も君のことを好むだろう。(村上)
- (18) とてもむずかしい手術だっていうことで、家族のみんなは私のことを半ばあきらめていたくらいなの。(村上)
- (19) 「あなたは本当に祖父のことをそんなには怒ってないの?」と娘が訊ねた。(村上)

感情要素に関わる述語以外に次のような述語も必須要素ではないコトと共起する。

探す・見つけるタイプ

- (20) ずっとあなたのことを探していたのよ。
- (21) やっと田中さんのことを見つけたわ。

4.2.3 N に関する制限

(12)–(19) の述語はすべて、個体を対象としその個体に対してある種の感情を向けていたり、存在を探したりするものである。従って対象となるものはある特定のものでなければならないため、次の文は適格文ではない。

- (22) *研究のコトを憎んでいる
- しかし指示詞を伴い、definiteness を伴うと適格な文となり、実際のデータにも現れる。
- (23) 彼らはこの研究のことをすごく憎んでいたから(村上)
- (24) だからほんとうのことを言えば、この発電所のことも好きなんです(村上)

4.3 中間的な述語

次のような文は、コトがない場合も解釈が可能な文である。

- (25) 昼間はいいが、夜は長女のことを思い出して、とても読めない。(朝日)

「思い出す」という動詞は、個体の存在自体を思い出すという意味にもとれるし、「その個体が参加者であるイベント」を思い出すという意味にもとれる。更に、個体の存在自体と「その個体が参加者であるイベント」両方を合わせたものを対象にしているという意味にもとれる。従って、このような述語が補部に「Nのコト」とをとるとその解釈は多義的になる。

(26) 夜は長女のこと 생각이出される

「思い出す」が受動化し「思い出される」になっても、「Nのコト」は「が格」をとる。これは、コトが必須要素の読みになっており名詞句の主要部として機能しているからである。つまり、「Nのコト」をとる述語は同じでも、後続の格要素によってその解釈が変わる、ということである⁵。中間的な述語には次のようなものがある。

(27) 知っている, 思い出す, 思い起こす, 忘れる, 知っている, 思い浮かべる, 考える, 思う, 調べる, 批判する, かぎつける, まねする, 理解する, ほめる

(28) テレビなどで私たちのことを批判しているが、信じてはいけない(朝日)

(29) 不測の犠牲者を出し、娘親子のことばかりを悲しんでいられない大塚さんの心中は複雑だ。(朝日)

(28)(29)の例は、いずれも受動化、名詞句化できる。しかし「を格」をとっている場合はコトが必須要素でない解釈もできる。この中間的な述語の対象に現れる「Nのコト」が必須要素とそうでない場合の接点である。

5 まとめと今後の課題

本発表では、統語的なテストにより、「Nのコト」を対象とする述語をコトを必須とするもの、必須としないもの、中間的なものの三つに分類した。特に、コトを必須要素としない述語については、次のようなことを明らかにした。

(30) 「Nのコト」を選択する述語の特徴:

- ある特定の個体を対象にする感情要素を含むタイプ
- ある特定の個体の存在を「探す・見つける」タイプ

このタイプの「Nのコト」は会話文にのみ現れ、話し手の視点が関わる。この「Nのコト」を選択する述語の特徴(30a)(30b)は、一見全く異なる性質のように見えるかもしれない。しかし「探す」という行為が、対象に対するある種の心的態度に基づいているとすると、この二

⁵ 述語と後続する格の違いにより「Nのコト」内部の構造が異なる。即ちNまたはコトのいずれが主要部であるか、という問題である。この際4.2.3節で見たNの definiteness も関わってくる。(笹栗(準備中))

つは同じ性質であると言える。このことと、4.3節でみた中間的な述語について更に細かい分析をすることが、「Nのコト」を統一的に説明する鍵になるはずである。

また、「Nのコト」には次のような用法も存在する。

(31) 「彼ら」とは、末端の官僚体制のことだった。(朝日)

(32) 田中は山田のことを石田だと思っている。

(31)は判定詞を伴い文末に現れる「Nのコト」である。また、(32)はいわゆるECM構文で、この構文内でも「Nのコト」は「を格」しかとらないという制約をもつ。このいずれの場合にも「言い替え」や「思い違い」といった、話し手の視点や心的態度が関わっており、本発表の「Nのコト」分析を拡張することにより、説明が可能になると予測する。以上を今後の課題とし、稿を改めて論じることとする。

例文出典

(赤川) 赤川 次郎『女社長に乾杯!』1984 新潮社 (CD-ROM版 新潮文庫の100冊)

(朝日) 朝日新聞東京本社 1987

(村上) 村上 春樹『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』1988 新潮社 (CD-ROM版 新潮文庫の100冊)

参考文献

- 国立国語研究所(1962)『現代雑誌九十種の用語用字 I 総記および語彙表』国立国語研究所報告 21
工藤 真由美(1985)「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文解釈と鑑賞』3
笹栗 淳子(1996)「現代日本語における「Nのコト」の分析—2つの用法と「コト」の統語的位置—」九大言語学研究室報告 第17号
笹栗 淳子(準備中)「名詞句のモダリティとしての「コト」—「名詞のコト」と述語の相関から—」
寺村 秀夫(1968)「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12号(『寺村秀夫論文集—日本語文法編—』(1992)収録 くろしお出版)
田窪 行則(1989a)「文の階層構造を利用した文脈情報処理の研究 対話における知識処理について」『言語情報処理の高度化研究報告 7 言語情報処理の高度化の諸問題』文部省科学研究費補助金特定研究, 昭和61年度~昭和63年度
田窪 行則(1989a)「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版
田窪 行則(1990a)「対話における知識管理について—対話モデルから見た日本語の特性」『東アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
田窪 行則(1990b)「日本語のメタ的表現について」未発表資料
Kuno, S. (1973) "Subject Raising," *Syntax and Semantics* 5, Academic Press.